

## 個体化の一元的な原理の多様性と二元的な原理の一様性

トマス・アクィナスとボナヴェントゥラ

石田 隆太(日本学術振興会特別研究員)

個体化の原理(*principium individuationis*)という概念を西洋中世に遡って捉えようとする場合、神学者たちによる様々な議論に遭遇することになる(\*1)。彼らにとっては個体という概念一般が直接に探求の対象になっていたわけではない。あくまで彼らにとって主題となるべき問題に解答するための道具立ての一つに個体化の原理という概念があったと言える。例としては、神、天使、人間といった知性を持つ存在者が、普遍的なものだけではなく、個的なものをどのように知性認識できるのかという認識論的な問題を挙げることができる。他にも、天使という具体的な存在者が個的なものであること(固有な言い方をすれば、パーソナリティを持つものであるということ)の根拠は何であるのかという存在論的な問題も議論されていた。後者の問題は本発表でも特に重要な題材となる。

ところで、十三世紀を代表する二人の神学者に焦点を当てると、個体化の原理という概念がアリストテレスに由来する質料形相論という理論の中で説明されている光景を目の当たりにする。一人はトマス・アクィナス(c.1225-1274)であり、彼は質料的な事物に対して個体化の原理は質料(厳密に言えば特定化された質料)であることを明確に提示する(\*2)。もう一人はボナヴェントゥラ(c.1221-1274)であり、彼は被造物全般に対して個体化の原理は質料と形相の二つであると述べる(\*3)。

この二人に焦点を当てる場合、同じ質料形相論を受容する両者において、各々が保持している理論の違いが見られることに注意すべきである。すなわち、ボナヴェントゥラは神以外の被造物全般に対して質料と形相からなる複合を認めるのに対して、トマスは被造物の中でも特に天使という存在者には質料とのいかなる複合も認めない(\*4)。そのような両者の理論上の相異を前提するならば、ボナヴェントゥラにおいては被造物全般に当てはまる個体化の原理が想定されているのに対して、トマスにおいては質料的存在者と非質料的存在者とで別々の個体化の原理が想定されているという図式を得ることができる。

このようにして、個体化の原理という概念の射程にどのような存在者が含まれているのかに留意することは、個体化の原理をめぐる哲学史を見通すにあたり一つの有用な視点であると思われる。少なくともこの視点は、個体化の原理の候補として知られる、指定された質料(*materia signata*)、このものの性(*haecceitas*)、存在性(*entitas*)といった概念にのみ拘泥してしまう危険性をいくらか排除してくれるからである。しかし、個体化の原理をめぐる哲学史を構築するためには、さらに詳細な分析を必要とするだろう。すなわち、最終的には、個体化の原理という概念そのものがどのようなものとして使用されているのかを見極める必要がある。

本発表は、以上のような問題意識を前提とした上で、トマスとボナヴェントゥラという二人の人物に特化した仕方で個体化の原理という概念が使用されている思考の枠組みを整理することを目指す。個体化が見出される対象を神以外の被造物に限定するならば、個体化の原理として何が指定されているのか、あるいは指定されうるかという点は次のように整理される。まずボナヴェントゥラにあっては、被造物全般にとって質料と形相の二つが個体化の原理であると言える。次にトマスにあっては、質料的存在者にと

っては質料が個体化の原理であるのに対して、天使にとっては形相が個体化の原理であると言える。まとめれば、トマスは個体化の一元的な原理を存在者の種類に応じて多様化させているのに対して、ボナヴェントゥラは個体化の二元的な原理を一様化させている。

この整理を踏まえて、次に問われるべきは、個体および個体化という概念そのものが両者においてどのように捉えられているのかということである。トマスの場合、天使は個体の数だけ種の数があると主張される。そこでは、個体化は同時に種別化を意味することになる(\*5)。それに対して、質料的な存在者において、個体化は一つの種に属する複数の個体が数的に区別されることを意味する。このようにしてトマスにあっては個体化という概念の多様性が見られるが、ボナヴェントゥラはどうか。この点を吟味することが特に問題となる。

最終的には、個体化の原理という概念が哲学的に見てもトリヴィアルなものにすぎないとは決して言えないことが強調されることになるだろう。個体化の原理を理解することは、個体化の対象となる存在者そのものがどのように捉えられているのかということの理解と直結している。それゆえ、個体化の原理をめぐる哲学史研究は、中世の神学者が予期しなかった仕方で、個体という概念そのものの探究に寄与することになる。

\*1 Cf. PICKAVÉ, M. “The Controversy over the Principle of Individuation in Quodlibeta (1277-ca. 1320): A Forest Map”. In *Theological Quodlibeta in the Middle Ages: The Fourteenth Century*, pp.17-79. Ed. Ch. SCHAPEL. Leiden-Boston: Brill, 2007.

\*2 Cf. KLINGER, I. *Das Prinzip der Individuation bei Thomas von Aquin: Versuch einer Interpretation und Vergleich mit zwei umstrittenen Opuscula*. Münsterschwarzach: Vier-Türme-Verlag, 1964.

\*3 Cf. KING, P. “Bonaventure (b. ca. 1216; d. 1274)”. In *Individuation in Scholasticism: The Later Middle Ages and the Counter-Reformation, 1150-1650*, pp.141-72. Ed. J. J. E. GRACIA. Albany: State University of New York Press, 1994.

\*4 Cf. WIPPEL, J. “Metaphysical Composition of Angels in Bonaventure, Aquinas, and Godfrey of Fontaines”. In *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, pp.45-78. Ed. T. HOFFMANN. Leiden-Boston: Brill, 2012; 坂口ふみ。『天使とボナヴェントゥラ——ヨーロッパ13世紀の思想劇』。岩波書店。2009年。

\*5 Cf. PINI, G. “The Individuation of Angels from Bonaventure to Duns Scotus”. In *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, pp.79-115. Ed. T. HOFFMANN, Leiden-Boston: Brill, 2012; SUAREZ-NANI, T. *Les anges et la philosophie: Subjectivité et fonction cosmologique des substances séparées à la fin du XIII<sup>e</sup> siècle*. Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2002; WOOD, R. “Angelic Individuation according to Richard Rufus, St. Bonaventure and St. Thomas Aquinas”. In *Individuum und Individualität im Mittelalter*, pp.209-29. Ed. J. A. AERTSEN & A. SPEER. Berlin-New York: Walter de Gruyter, 1996; COLLINS, J. *The Thomistic Philosophy of the Angels*. Washington, D. C.: The Catholic University of America Press, 1947.